① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第21巻 第12号　1976年12月25日　大町山岳博物館

ベニマシコ

撮影　北原　正宣

「民宿」今・昔・これから

秋の収獲が終る。アルプスからの吹きおろしは日増に強まり、葉を落した木々が寒々とふるえている。

そして或る日周囲は白一色の世界になる。スキーシーズンの到来である。住民三百余名のここ栂池高原は一夜あければ人口は住民の約五十倍にふくれあがる。

十数年前の栂池では考えられない光景である。当時は川内部落の茅葺屋根の宿に数百人程のお客が入り、徒歩で鐘の鳴る丘へ通ったのである。

リフトは一基もなく、新雪のあとにはノウサギ・キツネ・テンやクマの足跡が、くっきりと朝日に浮び、地元のハンターは浮足だったものである。

それが現在では、リフト二十数基、また、近々ロープウェイの架設も実現されることになっている。

部落の人々はすべて高原に上り、県内外の人々も含めれば、民宿数は百数十戸を数える民宿とはいえ、設備は一般旅館と何ら変りがない。そればかりか、一流ホテル並に変ってゆく気配さえある。

都会では今、自然の大切さがさかんに叫ばれている一方で、その都会人が設備のより整った宿を求め、スキー場もアルプスの中腹から頂上へと、赤く地肌をのぞかせた大スロープに集中し、シュプールをえがくことを望んでいる。

昔ながらのいろりを囲む宿は、必然的に消えざるをえない。

経営する立場になると、お客本位に改築・新築を余儀なくされる。

それに並行して、是非問題は別として、スキー場の開発が求められる。

スキーヤーのあくことのない欲望が、スキー場を奥へ〳〵と進めている観もある。

これからの民宿、どこまでエスカレートするのか見当がつかない。

（小谷村栂池高原ロッヂ経営　横沢洵）

信州の高山蛾

宮田　渡

三〇〇〇m級の山は飛弾山脈に四峰、赤石山脈に四峰で全国の三分の二を占め、二〇〇〇m以上の山が一五〇座近くある。信州が高山昆虫の豊庫といわれるのも当然であろう。

信州の高山にすむ昆虫のうちでミヤマモンキチョウ、ミヤマシロチョウ、クモマツマキチョウ、タカネヒカゲ、クモマベニヒカゲ、オオイチモンジ、コヒオドシ、タカネキマダラセセリ、ヤリガタケシジミなど高山チョウ一〇種が県天然記念物に指定されたのは昭和五〇年二月であった。同じりん翅目でありながら高山蛾の方はとくに採集禁止の措置がとられていない。これは、チョウとちがい蛾の採集マニアがきわめて少ないためである。

チョウの種類にくらべて蛾のそれはきわめて多い。従って、高山特有の蛾もずっと多い筈だと考えられていた。ところが、だんだんと調査がすすみ、平地から高山にかけての垂直分布が明らかとなった今日では、それほど種類数は多くないということがわかってきた。

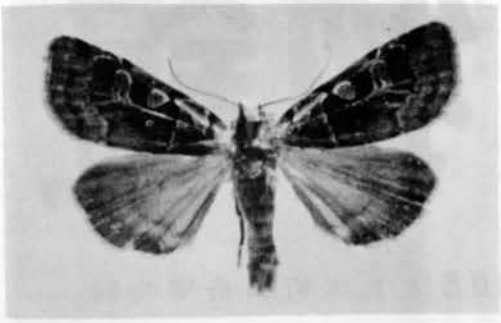

写真1　信州の高山を代表するタカネモンヤガ

以下、長野県を中心とした本州中央高地帯の高山蛾について解説する。

中央高地帯固有の蛾

中部高地の標高およそ二三〇〇m以上のハイマツ帯に産する蛾を真正高山蛾とよぶ。これには次のような種類が知られている。

ヤツガダケヤガ *Amathes* (*Anomogyna*) *yatsugadakeana* MATSUMURA　一九一八年に杉谷岩彦氏が八が岳で採集されたのが初めである。産地は八が岳連峰青年小屋・編笠岳・蓼科山・黒百合平、南アルプス、妙高山塊火打山など（二四〇〇m付近）。本種はアルプスヤガに似ているが、翅の色調が黄褐色を呈し、腎状紋の中心に暗色点を現わさない。妙高山塊のものは翅が赤味を帯びているという。本年は白馬大池で記録された。

アトジロアルプスヤガ *Amathes sincerii* HERRICH-SCHAFFER本種もアルプスヤガに似ているが、ずっと小さく、前翅はうすい銀灰色で、環状紋は中心に暗色点がない。後翅は一層白色である。一九六六年に神保一義氏によって南アルプス白根御池（二三〇〇m）から初めて報告された種であるが、まだ他の山岳からは発見されていない。欧州・北米の極地に産する蛾であるという。

タカネモンヤガ *Amathes wockei* MÖSCHLER　北アルプス蝶が岳（二六六四m）で神保一義氏が一九五三年に採集されたのが初めで、続いて一九五六年には春田俊郎氏が三ツ岳（二八四五m）で採集された。当時はまだ学名が判明せず*Amathes sp.*として扱われていた。一九六五年に杉繁郎氏によって表記の学名が当てられた。北アルプス以外では八が岳連峰横岳（二四七三m）と硫黄岳（二七四二m）で得られている。（写真1）

タカネハイイロヨトウ *Mamestra glauca* HÜBNER　前翅は紫灰色で強く暗色鱗をもつ。春田俊郎氏によって北アルプスの尾根地帯（蝶が岳、常念岳、烏帽子岳、針ノ木岳、西穂高岳、立山、五色が原）で発見されたのが最初である。その後、燕岳（二七六三m）、御岳の王滝頂上と四ノ池付近などから記録されている。本種は二四〇〇m以上のハイマツ帯に分布する蛾でヨーロッパやシベリヤでも山岳地帯に産する最も極地的な種の一つであるといわれている。

タカネヨトウ *Sympistis melaleuca* THUNBERG　丸毛信勝氏は一九二九年八月二日に中央アルプス駒が岳（二九五六m）で採集した本種をタカネシロシタヤガの和名のもとに記録している。この和名が示すように後翅に白色部が多く、小型ではあるが昼飛性であるため、飛ぶときはきらきらと輝くように美しい。採りそこなうと、地面に落下して草むらにもぐってしまう。御岳四の池は御岳火口の中で最も大きく湿地帯となっていて高山植物が豊富である。ここはタカネヨトウの多産地で、八月上旬が最盛期である。今までの最も早い記録は七月一三日である。本種の他の産地としては、北アルプス常念岳・乗鞍岳・中央アルプス駒が岳、南アルプス仙丈岳が知られている。ハイマツ帯に展開する高層湿原に生活し、昼間敏速に飛びまわる。国外では、北欧地方、シベリヤ北部、カナダなどの沼沢地帯やツンドラ地帯に生活している。食草は日本でもガンコウランであろうと推定されている。（写真2）

アルプスクロヨトウ *Apamea rubriena* TREITSCHKE丸毛（一九二〇）により白馬岳から記録されたのは本種ではなくダイセツヤガらしい。北アルプスでは烏帽子岳・針ノ木岳・立山・五色が原・西穂高岳・乗鞍岳・中央アルプス千畳敷・御岳・妙高山塊火打山・八が岳、飯豊連峰などから得られている。

一九六八年に神保一義氏は御岳からオンタケクロヨトウを記録した。これはアルプスクロヨトウに近い蛾で、前翅表と胸背の鱗毛が灰色を帯び、腎状紋の白色部が「く」の字状に曲らず、まっすぐである点で区別される。学名は未定である。また、飯豊連峰からは近似種イイデクロヨトウが記録されている。アルプスクロヨトウに酷似するが交尾器は明瞭に区別されるようである。

なお、南アルプス北岳にはキタダケヨトウを産するというが、他の産地と学名は未知である。

クロモンツヤマナミシャク *Xanthorhoë fluctuata malleola* INOUE

北アルプスでは唐松岳（二六〇〇m）および西穂高小屋（二四八〇m）から記録されていたが、近年、南アルプス白根御池（二三〇〇m）・塩見岳などから発見されている。他の産地は今のところ知られていない。

サザナミナミシャク *Entephria caesiata nebulosa* INOUE　本州中部山岳地帯に分布する高山蛾の中では最も普通の種である。丸毛（一九三四）は*Cidaria caesiata*なる学名のもとに駒が岳から記録している。その後、中央アルプスでは、千畳敷・宝剣岳

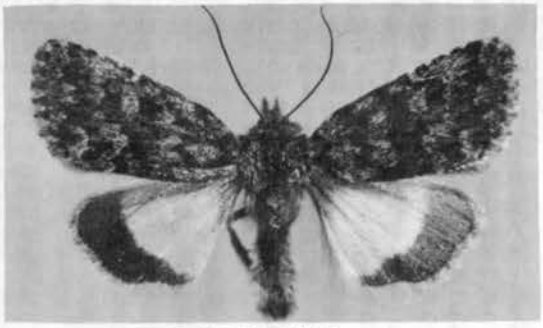

写真2　御岳のタカネヨトウ

・木曽殿越・檜尾岳・空木岳・前岳などで得られている。北アルプスでは白馬大池・八方尾根・唐松岳・餓鬼岳（二六四七m）・燕岳・常念岳・西穂高岳・上高地・乗鞍岳・御岳、南アルプス早川尾根・仙丈岳・白根御池・塩見岳・山伏峠、八が岳連峰本沢温泉（二〇六〇m）・硫黄岳石室・編笠山青年小屋・キレット小屋・黒百合平（二一〇〇m）・北横岳・蓼科山樹林内および加賀白山、妙高山塊火打山などが主な既産地である。上高地では夜間旅館の窓から飛び込んでくるし、乗鞍では位が原より上部を歩いていると岩かげから飛び立つのはほとんど本種である。成虫は七月下旬から九月上旬にわたってみられる。神保一義氏によると中央アルプスで九月一五日、南アルプスでは九月一四日に採集されたのが最もおそい記録であるという。また、同氏によると本種は幼虫越冬ではないかと推定されている。御岳での観察によると、本種の幼虫は日没後夜つゆがおりる頃にシャクナゲ科の植物にはいあがってくる。日中は見ることができない。

ウチジロナミシャク *Dysstroma truncata* HUFNAGEL　常念小屋（二五〇〇m）で採れたのが最初で、その後、西穂高岳、御岳、八が岳、中央アルプス千畳敷（二六〇〇m）・木曽小屋（二九〇〇m）、南アルプス北岳・塩見岳・三伏小屋などから記録された。

ミヤマチビナミシャク *Perizoma Japonica* INOUE　北アの常念小屋付近で七月下旬に得られたのが最初である。その後、白馬尻・八方尾根、南アルプス白根御池、群馬県笠が岳（二〇五六m）で記録されている。

タカネットガ *Calopteria harutai* OKANO 南アルプスの荒川小屋（二六〇〇m）から荒川岳、（三〇八〇m）の草原で発見されたメイガ科に属する高山蛾である。北岳でも夜間採集で得られている。同じくメイガ科に属する蛾にウスグロマダラメイガがあるが、常念小屋以外には知られていない。

タカネハイイロハマキ *Clepsis monticolana* KAWABE 一九六四年に川辺湛氏によって新種記載された。既産地は立山の弥陀が原・五色が原・針ノ木岳・加賀白山である。乗鞍岳・常念岳・御岳・八が岳・金峰山に産する個体は小型で暗色を帯びる。ハイマツをたたくと飛び立つ。（写真3）

右の種以外でハイマツ帯に生息する種は次のようなものがある。

タカネベニハマキ（北アルプス・中央アルプス・八が岳・奥秩父金峰山・南アルプス・飯豊山）。

中央高地帯以外の高山にも産する蛾

ホッキョクモンヤガ *Agrotis patula* WALKER 低地産のセンモンヤガによく似た蛾である。はじめ赤石山脈の北岳と飛騨山脈の白馬鑓で発見されたときは、この蛾は昼飛性であろうと考えられていた。その後各地で採集されるようになって、主たる生活は夜間であることがわかってきた。私が白馬岳で得たのも、村営小屋の灯火に飛来したものであった。その他の産地は、八方尾根・南アルプスの仙丈岳・農鳥小屋・東北では鳥海山・飯豊連峰・朝日連峰・北海道などが知られている。

写真3　タカネハイイロハマキ

ダイセツヤガ *Amathes imperita* HÜBNER 北海道大雪山で最初に発見されたのでこの名がある。近年、本州の各高地での発見が相次いだ。北アルプスの針ノ木岳・五竜岳・乗鞍岳・中央アルプス・御岳・八が岳・南アルプス仙丈岳・山形県月山・東北の岩手山・飯豊連峰・朝日連峰なであるが、本州における最も古い記録は木曽殿越（一九六〇年佐久間）である。

アルプスヤガ *Amathes*（*Anomogyna*）*speciosa* HÜBNER　高山蛾としては普通種。加賀白山から北海道まで分布するが、今のところ東北からは発見されていない。北アルプスでは天狗原・白馬大池・唐松岳・針ノ木岳・三俣蓮華・鳥帽子岳・常念岳・西穂高岳、その他の高山では御岳・中央アルプス・八が岳連峰・南アルプスおよび北海道などである。丸毛（一九三四）が中アの駒が岳濃が池で昭和四年に採集したものにコマガタケヤガの和名を付しているのは本種である。

アルプスギンウワバ *Syngrapha alpina* ICHINOSE 北海道・東北・本州中部の高山に分布する蛾であるが、ときには一五〇〇m級の低標高地にも産する。色彩に変化があるので、ハイマツ帯のものと低いところに産するものとは将来分けられるかもしれない。北アルプスでは白馬大池から乗鞍岳まで広く分布し、その他の産地としては、御岳・中央アルプス・八が岳連峰・浅間山・南アルプス・県外では加賀白山・谷川連峰・群馬県笠が岳・妙高山塊火打山・東北の高山・北海道などである。

シロテンサザナミナミシャク *Entephria amplicosta* INOUE 北海道と本州中部高山に分布する前記サザナミナミシャクの近縁種である。一見サザナミナミシャクの黒化型のように見える。北アルプス湯股・乗鞍岳・南アルプス北岳・荒川岳・八が岳・妙高火打山・北海道大雪山などで得られている。食草はジムカデ。

ソウンクロオビナミシャク *Thera sounkeana ishizuka*, INOUE　ミヤマクロオビナミシャクとよばれていたが、別種に同名があるので、佐藤力夫氏によって表記のように改称された。北海道大雪山のものは *T. sounkeana Mats.* で、さらに千島には別亜種がいる。北アルプス白馬岳・西穂高岳・乗鞍岳・御岳・中央アルプス・八が岳連峰・南アルプス・妙高山塊火打山・加賀白山・谷川連峰・西吾妻山・群馬県笠が岳などに産する。

アルプスカバナミシャク *Euphitheeia perpaupera* INOUE　一九六五年に井上寛氏によって新種記載された大型のカバナミシャクである。御岳、乗鞍岳・蝶が岳・西穂高岳、八が岳、南アルプス、中央アルプス、妙高山塊火打山、加賀白山、群馬県笠が岳・片藤沼、飯豊連峰、鳥海山などが既産地である。

ハスジトガリヒメシャク *Scopula ichinosauana* MATSUMURA　北海道、荒川岳、駒が岳、鹿島槍（二八〇〇m）が産地として知られているだけである。

その他、小蛾類ではハイマツコヒメハマキ（北アルプス、南アルプス、御岳、早池峰、岩手山）、タカネハマキ（大雪山、渋峠、北アルプス）、ミヤマカギバヒメハマキ（北アルプス）、ミヤマキハマキ（大雪山、北アルプス）、タカネナガバヒメハマキ（大雪山、白馬岳）などが知られているが、今後調査がすすめば分布範囲がもっと広がるものと思われる。

おわりに

以上、高山蛾について、中部山岳地帯を中心に述べてきたが、亜高山帯特有の蛾もまたいくつかいる。チビアトクロナミシャク、モンクロキイロナミシャクなどがそれで、準高山蛾ともよばれる。私がここに真正高山蛾としてあげたものの中にも、将来調査がすすめば、準高山蛾に格下げになる種が出てくる可能性のあるものが含まれている。

高山帯で採集される蛾がすべて高山蛾ではない。本州中部の高山帯で採集記録のある蛾の種類数は、ヤガ科に属するものだけでざっと一二〇種である。このうち純高山蛾は二五%で、残りは好高山蛾と偶産高山蛾である。

（豊科高等学校）

雪と山村（1）

―長野県北安曇郡小谷村の場合―

青木　治

一、冬の気象

「岳に七度雪が降ると、里にもくる。」姫川に添った小谷でも奥山に七度目の雪がくる十一月の中、下旬頃には雪が降り、翌年の五月頃まで、そこここに雪が残っている。小谷、四ケ庄の気候は裏日本型で、一・二月の曇天平均は、一五～二〇日で、快晴の日は四、五日に過ぎない。しかも一月の降雪日数は二十三日西部山地や北陸地方と同じで、積雪量が多い。降水量は年平均二、〇〇〇㎜を越えるが、冬季に著しい。降水日数一九二日、積雪日数一〇六日、根雪期間八四日、最深積雪二四七㎝、この統計は一九一〇年から四〇年間の南小谷付近の平均値である。

一～二月の降雪の最盛期になると、電話線の柱の頭だけが見える三～四ｍの積雪に達する処もある。然し峠や尾根などを除いては村の中に吹溜りをつくる事が少ない。雪は舞うとか降るという感じでなく、大粒なボタ雪が落ちてくるといった方がよい。一夜のうちに一ｍ余も積るのは珍らしくない。冬の北風は姫川谷口より雪を運んでくるが、春はいち早く、この谷口から暖気が流れ込むので、積雪量の多い割に根雪期間が短い。南小谷での年平均気温はＣ一一・三度で大町や白馬より一～二度位高い。しかも雪の下の温度はＣ０度であるので、外気より暖かく温度の変化が少ないので、野菜の貯蔵にも役に立っているし、山野には椿も自生している。

湿った雪の上に、時々の寒気で軽い新雪が積ると、ワボ（表層なだれ）が起きる。三月になると積った雪がしまってくる。降る量も減るし、ザラメ雪となり堅くなるので、交通も便になり、道路や山野にも橇引の活動が初まる。

二、雪と家屋

小谷の家の殆んどは茅葺か、一部に板葺の置石屋根も見られた。今の屋根葺の材料は、カラートタン板葺が多く、しかも古い茅葺、板葺屋根の上にトタン板をのせ葺く家が多い。

古い民家の柱は太く（30㎝角）、長さも六ｍ、堅い樺材が多い。ほかに杉材も用いられ、桁・鴨居も巾が広く、厚い材料を使っている。屋根裏には前後左右に太い曲った独得の梁が渡されている。これを上りがまの梁（豪雪によって、この地に豊富に育つ杉の幼木の根元は、雪で押曲げられながら、ぐんぐん育つ、この太く大きく育った根元の曲りを利用した梁）と呼ぶ。今の建築は曲った根元は切捨て、しまうが、先人達はこの曲り（サルノポリ）を住宅建築に活用した。また丸木のさす組の屋根裏の組立材にも用い調和させ、円やかな味と強靭さと、堅固な家にしていた。

これは上からの豪雪の圧力にたえるための建築である。

家の外壁には、雪を防ぐためシタミ板を取付けてある。昔は豊富に取れる杉皮や茅であったという。正面の出入口はトンボ庇と呼ぶ二ｍほど玄関様に突出している。雪の中からトンボに入り、雪を払い、奥の土間の壁に蓑笠を掛け大戸から中に入る。農具なども掛けてある。

一一月に入ると母屋も物置も茅の束を並べたり、稲藁を掛けたりして、壁を雪から守る。採光用の表の縁側（ガンゲ）にも、雪除けのシタミ板を取りつけるので、家は暗くなる。雪下しをすると、窓まで埋まるので、一層暗くなる。

屋根の雪下ろしは、多い年は年三回する。用具は軽いイタヤ材でつくったコッパを使う。

雪下ろしは、板屋根庇は普通のコッパを使い屋根先から落しはじめて、棟が後になるが、茅屋根は棟から落し始めて、下へ進む。急傾斜なので、麻縄で体を、ぐしに縛り着け、長柄のコッパで雪を突くように落す。

雪の降り初めや、早春の頃は、下の雪が解けて凍った上に、どか雪がくると、「雪がのる」といって、大雪が屋根から勢いよく、滑り落ち、茅屋根の茅をむしり取ることもある。

三、雪具と雪中の仕事

雪踏み、山仕事、猟、野良仕事等雪中の仕事も多いし、大雪の場所なので、雪具も工夫がこらされている。足には藁靴のスッペンショウ・ジョボケ・ゴンゾ等を履き、またはばきも付ける。頭からは子供は三九郎、大人はスッコ（藁の三九郎）か毛布を被る。またサンメ笠（菅笠）に蓑の姿も多い。蓑はこの土地の山葡萄の木の皮で作る赤蓑と、シナの皮のシナ蓑と、ミゴで作った藁蓑がある。

新雪や深雪の処に出掛けるには、根曲竹を曲げて、シナ縄の如き丈夫な縄で結んで作られるスカリと称する大型と普通型の輪カンジキと、輪は木製で、二本の爪を持つ、楕円形の爪カンジキ（ヒツカンジキ）がある。

「スカリを引く」と云う言葉があるが、大型のスカリに普通の輪カンジキを重ねて履き、縄を付けて、手で交互に引上げて歩く、その雪跡は村人のものは、一直線で上手に歩いている。

一夜に一ｍ余も降ると、スカリを足につけた雪踏みが始まる。二人以上で組をつくり、当番が家から家へ、部落から部落へと雪を踏み、道をあける。中々の重労働である。

三月が来ると雪もザラメ雪になり締ってくるので橇引が始まる。

薪炭材は一・八ｍ（六尺）に玉切りにし、一本橇で運ぶが、用材は二～三人で組をつくり、一本橇に十三尺ものは〇・四㎥、七尺ものは一・〇八㎥を乗せ、一人の運転手で山の急傾斜の雪上を巧みに、土場か林道まで下ろす。

この時期の女衆の野良仕事に、厩肥運びがある。一面は一～二ｍの堅い残雪、道も田畑も明瞭でない。厩肥を橇にのせて、田圃に運んで畦に添って置く、自家より高い田畑には、ショイヨッコ（背負袋）で滑る雪道を静かに背負上げる。

（穂高町教育委員長）

山と博物館第21巻第12号
一九七六年十二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町　大糸タイムス印刷部
定価　年額八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、一九三）